

エレミヤ書12章1-6節 「『なぜ？』という問いかけ」

1A 神への質問

1B 正しい神 1

2B 慈しみ(良い方) 詩篇 73

3B 主権者 ヨブ

2A 神への信頼

1B さらに試練の道 5-6

2B 「待て」と言われる主 ハバクク

3B 永久の道 詩篇 73

4B 質問を経た信頼

本文

エレミヤ書 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、11 章まで来ていました。午後礼拝では 12 章から 14 章までを一節ずつ読んでいきたいと思えます。今朝は、12 章 1-6 節に注目します。「1 主よ。私があなたと論じても、あなたのほうが正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことを私はあなたにお聞きしたいのです。なぜ、悪者の道は栄え、裏切りを働く者が、みな安らかなのですか。2 あなたは彼らを植え、彼らは根を張り、伸びて、実を結びました。あなたは、彼らの口には近いのですが、彼らの思いからは遠く離れておられます。3 主よ。あなたは私を知り、私を見ておられ、あなたへの私の心をためされます。どうか彼らを、ほふられる羊のように引きずり出して、虐殺の日のために取り分けてください。4 いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。人々は、「彼は私たちの最期を見ない。」と言っているのです。5 あなたは徒歩の人たちと走っても疲れるのに、どうして騎馬の人と競走できよう。あなたは平穏な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせよう。6 あなたの兄弟や、父の家の者さえ、彼らさえ、あなたを裏切り、彼らさえ、あなたのあとから大声で呼ばれるのだから、彼らがあなたに親切そうに語りかけても、彼らを信じてはならない。」

今朝、この箇所でも注目してほしい言葉は、1 節の「なぜ」であります。なぜ、悪者の道を栄えるようにされるのですか？という問いかけをエレミヤがしています。12 章は、11 章から始まる説教の続きです。ヨシヤが宗教改革を始めました。ヨシヤが、神の律法を読み、衣を裂きました。自分たちが神に真っ向から逆らっていることをしている、そしてそのような背信を続けているから、神の御怒りは今にでも下ろうとしている、と悟りました。そこで彼は、エルサレムにある偶像、ユダの町々にある偶像を一掃させ、過越の祭りを行ない、主にこの民を立ち帰らせるべく努力しました。ところが、その改革は民の心の深いところまで進んでいませんでした。彼は早くして戦死したのですが、その息子が王となるや、再び偶像礼拝を始めたのです。

ヨシヤと同じ時に、そしてヨシヤと同じような年であるエレミヤは、主の御心にかなう預言を行なっていました。ところが、人々はそれを聞かないばかりか、彼に対して中傷しました。それだけでなく、陰謀も企てました。知らないうちに、偶像礼拝を行なっていくべく画策していました。そして、何とエレミヤに対しても殺害の陰謀を企てていたのです。彼は、それを主ご自身から教えられていたようです。さらにひどいことは、彼の出身の町アナトテで、彼を脅し、彼を殺そうとしていたことも発覚しました。そんな中で、エレミヤがここで神に対して祈ったのが、「なぜ？」という問いかけでした。どうして主に命じられていることを行ない、語っているのに、それを聞かない者たちが栄えているのか？なぜ神に裏切りを働く者がそのまま動いているのですか？と問っています。

1A 神への質問

このことは、主の御心を行なおうとしている人たちにとっては、必ずぶつかる問いであります。イエスを信じるという行為は、そのまま葛藤と対立の中に入ることを意味します。自分の不信仰との対立。自分の肉との対立。この世との対立、悪魔との対立です。肉について言うならば、「ガラテヤ 5:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」とあります。信仰についていうならば、パウロがテモテに、「1テモテ 6:12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」と言いました。この世については、「1ヨハネ 2:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」とあります。そして、悪魔についてなら、「ヤコブ 4:7 ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」とあります。

ですから、主の御心を行なおうとすれば、必ず反対があります。それは直接的な反対だけでなく、心にある葛藤、状況や環境が主に従うようにさせなくなる圧力、人々との間にある誤解、悪意から来る中傷など、いろいろあります。心では、幸せになれると思いきや、恐れや罪との戦いが始まります。ですから、「なぜ？」という問いかけは、私たちの中に必ず出てきます。そして時に、その悪の力が神よりも現実的に見える、神が何もしていないのではないかと感じることもさへあります。

1B 正しい神 1

けれども、私たちは、エレミヤの言葉から大切なことを学ぶことができます。この「なぜ？」という問いかけが、もし神に不信を抱いているようなものであったり、神に挑みかかるようなものであれば、それは良くありません。しかし、エレミヤが神に尋ねているのは、神に挑みかかっていることではありません。それが分かるのは1節の始まりです。「**主よ。私があなたと論じても、あなたのほう**が正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことは私はあなたにお聞きしたいのです。」と言っています。神が物事の判断については、正しいのです、と言われていました。自分にとって分からないこと、理解できないことが起こっても、知っているところに彼は戻っています。神が正しいという知識に戻っているのです。神は正しいということを確認して、エレミヤは神に尋ねました。

2B 慈しみ(良い方) 詩篇 73

同じように、悪者が栄えることで自分の信仰が後退しそうになったと述懐している人がいました。詩篇の著者アサフです。「詩篇 73:1-3 まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。」悪者が栄えるのを見て、彼は自分の神に対する献身や奉仕が空しく感じました。自分がちょっとしたことで良心が痛み、それで主に自分の罪を告白し、主に立ち返ろうとしている。こうやって苦しんでいるけれども、巷では、そんなことが全く意味をなさないかのように、悪を行なっている者たちがいる。それで、その人たちは特段に問題があるようには思えない。むしろ主を信じているばかりに、自分をただ苦しめているだけではないのか、と空しくなってきたのです。けれども、彼は立ち直ります。「73:22 私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。」と述懐していますが、そのように立ち直れた理由は、やはり1節にあります。「まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。」と言っています。主は慈しみ深い方だ、あるいは善なる方だ、良い方だと言いかえることができます。主が悪意をもって事を行なわれているのではない、この方は良い方で私たちに善を行なうことのみを意図しておられる、という真理です。

ですから、自分の理解できないことが起こった時に、自分の知っているところに戻る必要があります。実は、この言葉はしばしば、牧者チャック・スミスが教えていたことです。そして彼はこうも言います。「自分の理解できないことによって、もう理解しているものを犠牲にしてはいけません。」ということです。理解しているのは、神は良い方だ、神は正しい方だ、慈しみ深い方だということです。これは知っているのに、このことを分からないことが起こった時に捨ててしまっはいけません、ということです。

3B 主権者 ヨブ

さらに、聖書に出てくる人物で思い出せるのは、ヨブですね。彼は、主を恐れる人で、正しい人でした。その地方の中で最も富んでいる人でした。ところが、一日にして家畜を失い、息子、娘を失いました。さらに健康を失いました。重症の皮膚病に罹ったのです。彼は、神に激しく問いかけます。自分には、このような災いを受けるような悪を見いだすことはできない、ということ強く訴えます。けれども、神が嵐の中に現れて、そしてヨブは灰の中に座り、悔い改めました。どうして、彼がそんな試練を受けながら、立ち直れたのでしょうか？彼は、神の主権を信じていたのです。ヨブ記の初めに、出てきます。「1:21 私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしくに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」主が与えられる方だけでなく、取られる方でもあります。それに対して文句を言うことはできない。なぜなら、神は主権者だからです。この方が望まれることを何でも行なう権利を持っておられます。陶器師が陶器に対してどのような形に造るか権利があるように、神は私たちをどうするかについての全ての権利を持っておられます。

したがって、私たちは一見、自分にとっては悪いこと、不都合なことが起こっても、「これも主の

御手の中で起こっていることなのだ。神がこのことを起こされたのだ。」と受けとれる時に、呼ぶと同じように、主を賛美することができます。ですから神の主権というご性質を受け入れていたので、彼がその後で神に問いかけても、不信になったり、挑みかかることにはなりませんでした。

2A 神への信頼

1B さらに試練の道 5-6

エレミヤは、12章 2-4節で、彼らが栄えているように見えるけれども、どうか彼らを裁いてくださいという祈りを捧げています。そして 5-6節で主が答えられています。「5 **あなたは徒歩の人たちと走っても疲れるのに、どうして騎馬の人と競走できよう。あなたは平穏な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせよう。6 あなたの兄弟や、父の家の者さえ、彼らさえ、あなたを裏切り、彼らさえ、あなたのあとから大声で呼ばわるのだから、彼らがあなたに親切そうに語りかけても、彼らを信じてはならない。**」なんと主は、エレミヤに、「なぜ？」という問いに答えておられません。「それは、こうこうだから、栄えているのだよ。」と順序立てて話してくださっておりません。そうではなく、「あなたは、徒歩でしかまだ歩いていないのだよ。それで疲れていたら、どうして騎馬の人と競走できるのか？」とされています。また、「平穏な地にまだあなたはいるのだよ、ヨルダンの密林でどうやって過ごせるのか？」とされています。ヨルダンの密林とは、ヨルダン川の両岸に広がっている茂みで、当時はライオンも出る所でした。ですから、これからもっと強い反対に遭い、迫害も受けることになるのだ、と主は言われているのです。

主は基本的に、「待っていなさい。わたしがあなたを救うのだ。このぐらいのことで疲れはてるな、わたしが支えているのではないか。もっと大きなことが来るのだ、それでもわたしはあなたを救うのだ。」とされているのです。主はエレミヤに、「わたしを信じなさい。」と基本的に言われています。イエス様も、十字架に付けられる夜に、動揺している弟子たちに言われました。「ヨハネ 14:1 あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

私たちはこの、「信頼する」ということを知らないといけません。自分で自分を救おうとする試みをあきらめて、神が救ってくださいと、自分に与えられた神の召しにゆだねます。パウロは死にかけた時のことをこのように話しています。「2コリント 1:8-9 兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」エレミヤ書を読み進めると、彼が同じように主に自分の命を明け渡している場面が出てきます。「26:14 このとおり、私はあなたがたの手の中にあります。私をあなたがたがよいと思うよう、正しいと思うようにしなさい。」主のしていることに信頼を寄せ、自分自身は主に明け渡します。

2B 「待て」と言われる主 ハバクク

主のしていることにゆだね、主を信じた人として、さらに預言者ハバククのことを思い出します。

ハバククはまさに、エレミヤより少し前に生きていた預言者です。ですから、マナセの時代から預言していたかもしれません。それで、その預言の背景もとても似ています。彼もまた、ユダの中にある暴虐に心を痛めていました。そして律法は無視されていました。主よ、正しい裁きを行なってくださいと祈るのです。ところが、主は確かに祈りを聞かれるのですが、それがバビロンによってユダが滅ぼされるという幻をお見せになりました。それでハバククは、このように神に尋ねるのです。「なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか。(1:13)」

そこでハバククは、自分は見張り所に立つと言いました。主が何を語られるかを見ようと言いました。彼もエレミヤと同じように、なぜかを尋ねたのです。すると主の答えは、こうでした。「ハバクク 2:3-4 この幻は、なお、定めの時のためである。それは終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」主はハバククに、「待て」と言われました。そして、「正しい人は信じるのだ」と言われたのです。何が起きているのかあなたには分からないけれども、わたしはわたしの事をしているのだ、だから待てと言われたのです。

そしてハバククは、最後に主にあって喜び勇んでいます。飢饉によってユダの土地は荒れ果ててしまったのに、それでも主にあって喜びました。彼はバビロンが終わりに永遠に裁かれる幻を見たからです。

3B 永久の道 詩篇 73

そうです、私たちは今、何が起きているか分かりませんが、神はご自分が何をしておられるかお分かりになっています。私が思い出すのは、海外宣教の土地にいた時に、自分のパソコンが調子が悪くなって、IT の仕事をしている兄弟のところに助けを求めた時のことです。外国語なので、私の拙い言葉で会話していたのですが、キーボードの位置も若干異なります。それで、彼も苦労していました。けれども、私は途中で口出したくなっただけです。そうしたら、私を制しました。私は、「なぜ、そんなことしているんですか？」と思っていたのですが、彼が制するのでパソコンを触らないでいたところ、見事に直ったのを覚えています。なおさらのこと、神は、ご自分が何をしておられるのか知っておられます。

先の詩篇のアサフも、そうでした。彼はこう言っています。「詩篇 73:17-19 私は、神の聖所にはいり、ついに、彼らの最後を悟った。まことに、あなたは彼らをすべりやすい所に置き、彼らを滅びに突き落とされます。まことに、彼らは、またたくまに滅ぼされ、突然の恐怖で滅ぼし尽くされましょう。」神は、終わりの姿をアサフにお見せになりました。それで彼は気を取り戻したのです。主は永久に生きておられる方です。それゆえに、その途中経過を私たちは理解することができないことがあります。だから信頼するのです。

4B 質問を経た信頼

そこで、大事なことを申し上げます。いろいろな信仰の人物を取り上げました。エレミヤ、ヨブ、アサフ、ハバクク、これらの人々が主に「なぜですか？」と尋ねましたが、それによって結果として、彼らの信仰が精錬されました。主のところに、自分の質問を持って行きました。それは不信から来たものではなく、主を信頼してのことでした。ゆえに、その質問を経た後の信仰は、神の訓練の中で清められています。つまり、質問を持たないでいる信仰と、質問を持っている信仰では、後者のほうが強いということです。

私たちは、質問を抱くこと自体が罪であるとか、不信ではないかと悩みます。こんなことを思ってしまうことは、自分が霊的ではないからではないかと思ってしまう。しかし違います、むしろそれらの質問によって、信仰が練り清められます。いろいろな試練に耐久力を持たせます。なぜなら、その質問の度に、主によって信頼を教えられるからです。あらゆる疑問に耐えてきた信仰が私たちを育ててくれます。